Wabi-Sabi ― 侘び寂び

東京造形大学
一二二〇七〇〇四　一色彩未

# 炎を用いた立体造形と質感表現の手法研究

## ―侘び寂びを形作る要素の再解釈を目的として―

1 Introduction - 導入 04

2 What is “Wabi-Sabi”？- 〈侘び寂び〉とは 07

3 Object - 研究目的 08

4 Materials & Method - 研究方法 09

5 Demonstrarion - 実証 10

6 Result - 研究結果 13

7 Discussion - 分析 / 考察 14

8 Conclusion - 結論 16

9 Afterword - あとがき 18

# 1

# Introduction

- 導入

## 日本から離れて日本の美意識を再認識する

半年間のドイツへの交換留学を経て、日本から離れたことで日本の何気ない日常が非日常であったことに気付かされるた。客観視することができ母国の文化を俯瞰して見れるような環境にいる中、とある本屋さんに立ち寄った。そこで、日本の文化について書かれている本が多くあり、その中でも〈侘び寂び〉に関する本に興味を持った。なぜなら、自然素材に触れ、造形することに魅力を感じていたからである。〈侘び寂び〉を語る上で、自然素材の存在は欠かせない。素材の視点から興味を持ったところで、〈侘び寂び〉について理解を深めていった。他国から見る日本の美意識を再認識できる良い機会であると感じた。

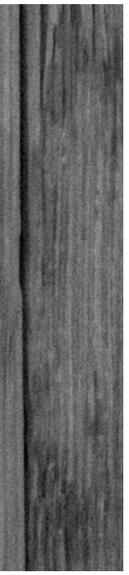
# 2

# What is “Wabi-Sabi” ?

- 〈侘び寂び〉とは

## 侘び＝生きとし生きる力強い生命
## 寂び＝その中にある孤絶観

〈侘び寂び〉とは、禅の影響から生まれた日本の伝統的な美意識の一つである。〈侘び寂び〉について理解を深め、自分の言葉で〈侘び寂び〉を再定義した。〈侘び寂び〉は、現代では一言で用いられることが多いが、本来、“侘び”と“寂び”はそれぞれ異なる言葉である。これらの言葉の背景には、日本の自然観がある。“侘び”とは厳しい自然界の中で生死の境目から生まれる美意識であると考える。“寂び”とは孤独や閑寂の中に美を見出すことを意味する。古いもの、寂しいものを否定することなく受け入れることで、そこにある生を感じようとする。諦めと受け入れの精神が深く厳しい美意識へと導く。



# 3

# Object

- 研究目的

### 〈侘び寂び〉の再解釈を目的とする

自分が解釈した〈侘び寂び〉の世界観を立体作品として成立できるか、〈侘び寂び〉の再解釈を目的とする。表現の手法として炎を用いながら、自分の〈侘び寂び〉を形作る質感表現を模索し、立体造形へと反映していく。そして、第三者にどうわかりやすく伝えることができるか考えていく。

# 4

# Materials & Method

- 研究方法

### 〈侘び寂び〉の瞬間を写真で記録していく

〈侘び寂び〉はよく茶の湯や日本庭園などを取り上げられて説明されるが、もっと本質を見ていけば日常生活の中にも〈侘び寂び〉のシーンはあるのではないか。日本の美意識であると言われるが、日本だけでなく、他国にも〈侘び寂び〉の場面が隠れているのではないかと考えた。そこで、私はドイツでの留学の間に〈侘び寂び〉だと感じる瞬間を写真として記録し始めた。帰国後も続けた。そして、身の回りにある自分の〈侘び寂び〉の空間に合いそうなものを探していき、立体作品としての表現を探していった。

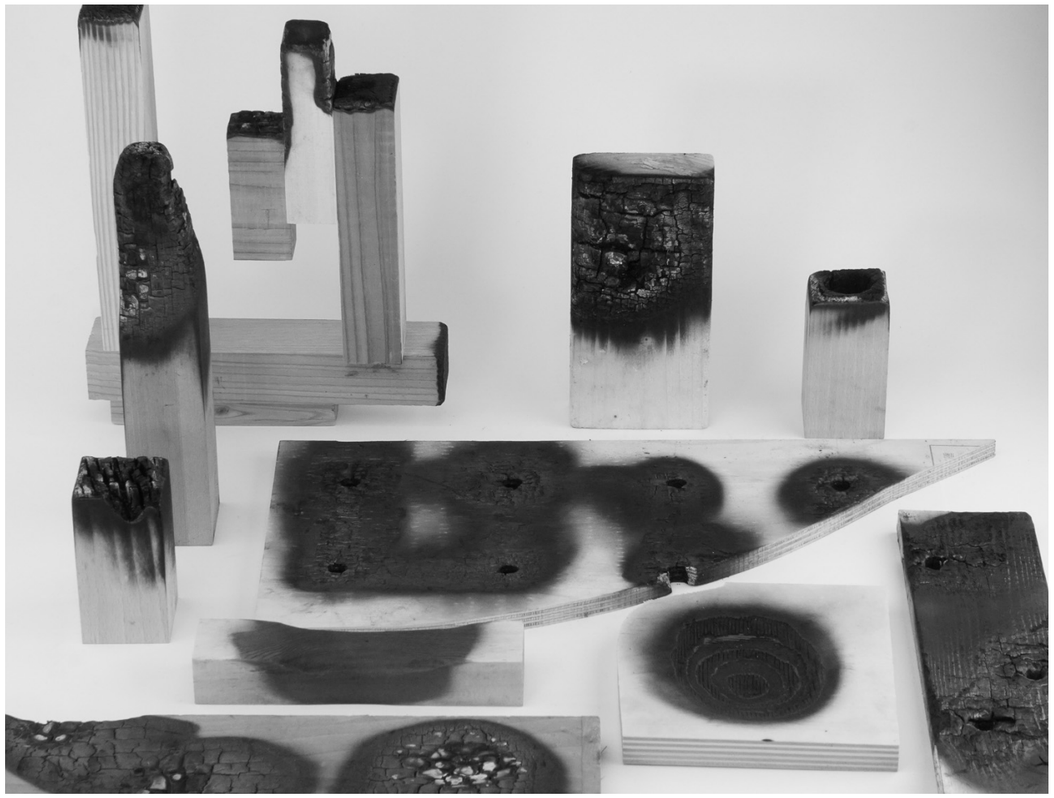
# 5

# Demonstration

- 実証

## 〈侘び寂び〉の再解釈を目的とする

ひとまず、身の回りにある自分が思う侘び寂びの空間に合いそうなものを抽出。その中にコンクリートの破片があり、素材の変化でどのように感じるのか試してみた。透明にしてみたところ、表面のディテールが可視化され、その表情が紙が燃えて灰になる様子を彷彿させた。そこから、石と燃やすことを組み合わせようと試みましたが、自分の世界観にそぐわず、発展が思うようにできなかった。なので、燃やすことに可能性を見出していった。



# 6

# Result

- 結果

## 侘び寂びを体現する

様々な燃やし方を試してきたが、もっとも私が表現したいことが体現されそうなものが、ガスバーナーで炎をコントロールしながら造形していくという手法だった。バーナーでも様々な燃やし方ができるが、際を保ちながら燃やしていくことで緊張感が生まれ、炎をコントロールできるからこその表現にした。また、炎というのは自然のものだが、炎が本来持つ自然的なものと炎をコントロールしながら木材を造形していく人為的な行為との対比が生まれる。

そして、なぜ角材を選んだかというと、角材は規格サイズが存在し、大量生産しやすいようになっている。素材としては、木材で自然素材だが、人間の手によりきれいに整えられ切られてしまっては、人工物のように感じる。そのような角材を燃やすことで、炎をコントロールし造形していく人為的な行為と重なるところがある。

また、角材の中でもなぜこのサイズにしたかというと、端材を使って検証していた過程で、野緑木材の規格サイズである 30x40mmをよく使っていた。それに対して高さが大体平均して 180mm ほどだった。改めてなぜこのサイズを無意識のうちに使っていたのか考えてみると、持ちやすいし見ていて違和感のない形であったから。もう少し深掘っていくと人間の体に由来するとされる寸に変換すると、高さ 180mm は約 6 寸であり、この数字は大体私が目一杯広げた手の親指から小指までの長さである。違和感のない、馴染みのあるサイズ感というのは、自分の体の一部にあることがわかった。

そのようなことから、人間の体を自然的なものと捉え、自然との繋がりの意味合いを込めた。

# 7

# Discusstion

- 分析 / 考察

## 目立たない細部にこそ美が存在する

立体作品だけでなく、それを読み解くための写真と文章にも落とし込んだことで、より深い（侘び寂び）の再解釈ができたとともに、より第三者にも伝わりやすい作品になった。く び寂び）を通して、自分と向き合い、自分を成長させてくれた作品でもある。く侘び寂び）とは朽ちていった過程により、さらに内向的な目立たない細部に美が存在し、それはとてつもない力を秘めている。その力とは、そのものの生命であり、人生の儚さである。表面上にある事実よりも、深淵に潜む価値を見つけることの方が大事なのではないか。それは、決して容易なことではないが、何よりも大事なことであると感じるのである。

# 8

# Conclusion

- 結論

本稿の目的は、自分が解釈した〈侘び寂び〉の世界観を立体作品として成立できるか、〈侘び寂び〉の再解釈をすることである。〈侘び寂び〉は、日本の美意識であると言われるが、日本だけでなく他国にも〈侘び寂び〉の場面が隠れているのではないかと考えた。そこで、研究方法としては、〈侘び寂び〉だと感じる瞬間を写真として記録し始めた。帰国後も続けた。そして、身の回りにある自分の〈侘び寂び〉の空間に合いそうなものを探していき、立体作品としての表現を探していった。様々な燃やし方を試してきたが、もっとも私が表現したいことが体現されそうなものが、ガスバーナーで炎をコントロールしながら造形していくという手法だった。バーナーでも様々な燃やし方ができるが、際を保ちながら燃やしていくことで緊張感が生まれ、炎をコントロールできるからこその表現にした。また、炎というのは自然のものだが、炎が本来持つ自然的なものと炎をコントロールしながら木材を造形していく人為的な行為との対比が生まれる。

そして、なぜ角材を選んだかというと、角材は規格サイズが存在し、大量生産しやすいようになっている。素材としては、木材で自然素材だが、人間の手によりきれいに整えられ切られてしまっては、人工物のように感じる。そのような角材を燃やすことで、炎をコントロールし造形していく人為的な行為と重なるところがある。

また、角材の中でもなぜこのサイズにしたかというと、端材を使って検証していた過程で、野緑木材の規格サイズである30x40mmをよく使っていた。それに対して高さが大体平均して180mmほどだった。改めてなぜこのサイズを無意識のうちに使っていたのか考えてみると、持ちやすいし見ていて違和感のない形であったから。もう少し深掘っていくと人間の体に由来するとされる寸に変換すると、高さ180mmは約6寸であり、この数字は大体私が目一杯広げた手の親指から小指までの長さである。違和感のない、馴染みのあるサイズ感というのは、自分の体の一部にあることがわかった。

そのようなことから、人間の体を自然的なものと捉え、自然との繋がりの意味合いを込めた。立体作品だけでなく、それを読み解くための写真と文章にも落とし込んだことで、より深い（侘び寂び）の再解釈ができたとともに、より第三者にも伝わりやすい作品になった。くび寂び）を通して、自分と向き合い、自分を成長させてくれた作品でもある。く侘び寂び）とは朽ちていった過程により、さらに内向的な目立たない細部に美が存在し、それはとてつもない力を秘めている。その力とは、そのものの生命であり、人生の儚さである。表面上にある事実よりも、深淵に潜む価値を見つけることの方が大事なのではないか。それは、決して容易なことではないが、何よりも大事なことであると感じるのである。

# Afterword

Wabi-sabi has a close relationship with materials. It captures the imperfections of the material as it naturally decays with rain and wind.

In an attempt to make the most of the current environment, I challenged myself to take photographs based on the idea of wabi-sabi at Schwäbisch Gmünd. The wabi-sabi aesthetic was born out of the Japanese view of nature, but I challenge myself to find the beauty of imperfection, impermanence and incompleteness, the beauty of modesty and modesty, the beauty of the unconventional, in different lands as well. Capture the ephemeral life in the land, which can only be sensed because you are not in Japan. No one knows what the result will be. I didn't know either. It is much scarier not to act because you are scared of the outcome. Whatever the outcome, you may discover things and facts that no one had imagined at the end of your action. Even if you don't get an interesting view, it's just a passing thing. It may become useful material for later. It can be used in the next stage. I wanted to do this project just to see what I thought. When I took photographs in Schwäbisch Gmünd, I realised that wabi-sabi is not the beauty of the material itself, but the beauty that exists in the more introverted and inconspicuous details of the decayed process, which has tremendous power. That power is the life of the thing, the fragility of life. It is more important to find the value hidden in the depths than the facts on the surface. It is not an easy task, but it is more important than anything else.

My experience as an exchange student has made me realise once again the importance of taking action. All the things that you can only do, experience and touch in a certain place are built up as experiences in your body. It is a feeling that even I did not understand. They are largely gained by having acted. They are assets that I have gained because I have acted. This experience moves me to my next action.

My curiosity guides me and moves me to action.
I step into the core of my own mind.



# あとがき

侘び寂びは素材と密接な関係を持つ。
素材が雨や風で自然と朽ちていく姿を捕え、その不完全な姿を捕えていく。

私は今の環境を最大限に活用しようと、「侘び寂び」の考えに基づく写真をシュヴァビッシュ・グミュントで撮ることに挑んだ。日本の自然観があるからこそ生まれた侘び寂びの美意識だが、異なる土地でも、不完全、無常、未完成の美、控えめで謙虚なものの美、型にはまらないものの美、は見つけることができるのではないかと挑戦する。日本にいないからこそ感じ取ることができる、その土地での儚い生命を捕える。結果的にどのようなことがわかるかなど誰にもわからない。自分もわからなかった。結果に怯えて行動できない方がよっぽど怖い。結果がどうであれ、行動した先には誰もが想像していなかった事柄、事実を発見することができるかもしれない。たとえ、興味深い見解ができなかったとしてもそれはただの通過点。後に役立つ材料となるかもしれない。その次の段階に生かすことができる。ただ自分の思ったことを確かめるという意味で私は今回のプロジェクトをやりたいと思った。シュヴァビッシュ・グミュントで写真を撮って思ったことは、侘び寂びとは素材そのものの美ではなく、朽ちていった過程によりさらに内向的な目立たない細部に美が存在し、それはとてつもない力を秘めているということである。その力とはそのものの生命であり、人生の儚さである。表面上にある事実よりも、深淵に潜む価値を見つけることの方が大切なのではないか。それは決して容易なことではないが、何よりも重要だと思うのである。

私はこの交換留学の経験を経て、行動することの大切を改めて痛感する。その土地でしかできないこと、体験できないこと、触れられないこと、全てのことが自分の身体へ経験として積み重なっていく。それは自分でさえもわからなかった感覚。それらは行動したことで得られたもの。行動したからこそ得られた財産である。この経験を生かして次なる行動へと私を移していく。

私の好奇心が私を導き、私を行動へと誘う。
自分の心の中核に足を踏み入れていくのだ。